大学生の対人関係におけるゲートキーピングの影響
―大学職員による学生支援の取組みに着目して―

○平野真弓（聖徳大学） 鈴木由美（聖徳大学）

キーワード：学生支援，ソーシャルスキル，ゲートキーピング

問題と目的

独立行政法人 日本学生支援機構が2018年に公開した「大学等における学生支援の取組状況に関する調査（平成29年度）」では，「悩みを抱えていながら相談に来ない学生への対応」について8割以上の学校が対応に苦慮している様子がうかがえる（佐藤，2018）。鈴木・川島・長屋(2014)は，教職員の困っている状況や，学生への支援の必要性や，支援の方法について，支援する側の視点から研究している。本研究では視点を学生に変え，学生が自ら心を開いて話せるようなスキルをもっていないと相談ができないのではないかと考え，ゲートキーピングに焦点を当てた。S.M.Allen and Alan J.Hawkins（1999）は，育児家事労働における夫婦間の協力関係を妨げる信念と行動をMaternal Gatekeepingと定義している。津村(2012)のゲートキーピング（Gate Keeping）は，ファシリテーションの中でコミュニケーション量を調節する行動のことと定義している。本研究でのゲートキーピングの定義は，学生が対人関係において「心を開いたり閉じたりする作用」とする。

本研究の目的は，大学生が対人関係（大学職員を含む）において悩みごとを相談する際に心を開く必要があると考え，高校時代の友達づきあいを通して大学生の対人関係について調査し，すべての学生を対象に大学職員ができる支援の可能性について探ることである。

方　法

調査対象者　A大学に通う41名（19歳～41歳）とB大学に通う59名(19歳～22歳)の合計100名

実施期間　2016年1月の後期試験終了後の休み時間を利用した。

調査内容　大学生を対象に質問紙調査を行った。高校時代に対応の困った友達がいたかどうか，また，どのような対応に困ったかについて自由記述方式で回答を求めた。内容は以下の通りである。1.高校時代あなたの周りに「気分にムラがある」「平気でウソをつく」「先生を困らせる」というような友達づきあいをする上で困った友達がいましたか。自由に書いてください。2.あなたはそのような友達に対して，どのような態度をとりましたか。a.近寄らないようにした，b.友達の機嫌が悪くならないように気をつかった，c.そんなことをしてはダメだよと伝えた。上記以外でありましたら自由に書いてください，という設問を用いた。

結　果

自由記述の回答の中で，一つの文中に複数の要素が含まれる記述があった場合は一番重要だと思われる内容を中心にして100枚のカードを作成した。これを基に，心理学を専攻する大学院生3名でKJ法を用いて分類を行った。分析の結果，得られた7つのカテゴリーは高校時代の友達について「気分にムラがある(22%)」「自分勝手・自分本位(10%)」「先生を困らせる(9%)」「平気でウソをつく(7%)」「人の悪口をいう(5%)」「授業中にさわぐ(4%)」「校則を守らない(3%)」というものであった。これらの視点から考察を試みた。また，2のあなたはそのような友達に対して，どのような態度をとりましたか，という質問では，a.近寄らないようにした 35 名，b.友達の機嫌が悪くならないように気を使った 35 名，c.そんなことをしてはダメだよと伝えた 10 名であった。20名は無回答であった。これら選択肢以外の回答としては「その時の状況や友達の立場を考え，注意したり，怒ったり，なぐさめたり対応を変えた」「明るい話題に変えようと努力した」「つかず離れずの関係をキープした」「普通に接していた。変に気をつかったわけでもなかった。めんどうくさそうな時はほっておいた。」というものがあった。

考　察

「不安など情緒的混乱」が「気分にムラがある」，「意図的な拒否」が「ウソをつく」，「教職員との関係をめぐる問題」が「先生を困らせる」「授業中にさわぐ」，「友人関係をめぐる問題」が「人の悪口を言う」，「学校のきまり等をめぐる問題」が「校則を守らない」と文部科学省の調査と類似している。これら問題行動の背景には，高校時代に友達づきあいをする上で対応に困った友達は「気分にムラがある」「自分勝手・自分本位」「先生を困らせる」で3割を占めていた。思春期の女子生徒は，他者に気を使い，自己を隠して対人関係を作ると考えていたが，他者の「気分にムラがある」とか「自分勝手・自分本位」であるということをわかった上で友達づきあいをしているということが興味深いと感じられた。